

氏 名	岡田 美保
学 位 の 種 類	博 士 (安全保障学)
学 位 記 番 号	第 6 6 9 号
認 定 課 程 名	防衛大学校総合安全保障研究科後期課程
学位授与年月日	令和3年3月21日
論 文 題 目	日ソ国交回復交渉の再検討 ーヤルタ合意と二つの対日交渉方針ー
審査担当専門委員	(主査) 神 奈 川 大 学 特 別 下 斗 米 伸 夫 招 聘 教 授 広 島 市 立 大 学 特 任 大 芝 亮 教 授 立 教 大 学 教 授 佐 々 木 卓 也

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、1955-56年の日ソ国交回復交渉過程を、ヤルタ条約に淵源する連合国関係からとりわけサンフランシスコ条約体制の下での日米関係の制約下で、日ソが展開した交渉の政治過程を政治外交史的手法で、とりわけロシア側史料が一部新たに公開されている研究状況を踏まえてなされた日ソ関係交流史の業績である。

とくに1955年7月ソ連共産党中央委員会総会で従来のモロトフ外務大臣の強硬路線に対し、フルシチョフ第一書記ミコヤン幹部会員ら平和共存派が外交の主導性を握る状況が出現、日本でも対米重視の吉田路線に対し、1954年末以降独自外交を進めようとする鳩山・河野の民主党系独自路線が出てくる状況下、日ソ双方が数次の断続的交渉を経て、1956年10月19日、日ソ共同宣言の調印に至ったかを解明した。

なかでもこの10年程旧ソ連史料が、いわゆる2島返還を示唆した契機になった55年7月総会の関係文書も含め公開され、これに刺激され日本でも三木文書などがでてきたことで、従来の解釈の誤りないし不正確の指摘等、複雑な交渉過程の細部が浮き彫りになってきたことは現実の平和条約交渉の進捗も絡むとしても筆者の史料探査の努力の賜物であろう。

ただその分この交渉を制約するヤルタ協定やサンフランシスコ条約の理解にはやや誤解がみられ、同盟や冷戦に関する従来の研究史のフォローがおざなりな部分も散見された。国際政治、国際関係論での基礎的理解を深める必要についても指摘があった。

上記の指摘がなされるのも、筆者の圧倒的な史料探査と分析の部分がこの主題に関するこれまでの分析をこえたと評価されるからでもある。この分野は平和条約交渉が進行中であることもあり、とりわけ日本での史料が乏しく多くの神話や誤解、宣伝が絡みがちであるが、岡田氏の研究は多大な貢献をもたらしており、よって博士(安全保障学)として合格と判定した。